

キヨリンピック

イタリアのトリノ・コルティナオリンピックは、日本の獲得メダル数が、歴代最多 24 個と日本勢が大活躍し、全種目の日程が終了しました。熱き闘いは、私たちに感動を与えました。熱き闘いは、パラリンピックへと受け継がれますが、清瀬中においても感動の競技大会『キヨリンピック』も壮大に開催されました。

キヨリンピック憲章は、「スポーツが好きも嫌いも楽しむことに価値がある」競技種目は、運動があまり好きではない生徒でも楽しめるよう生徒会の手で企画運営されました。ニュースポーツですので、大会開催日より前に説明会が行われました。



3日、“風船バレー”です。1チームは4人、コートはバドミントンコートで、ボールの代わりに風船を使いバレーボールを行います。空気の圧力を受けながらゆっくりと落下する風船は様々な選択をする時間を与え想像を超えるプレーが続出。同じ人が2回続けてタッチすることはできませんから、きょうに輪番で風船に向かっていきました。力ずくで風船を叩いたとしても腕の起こす風圧で上手くミートできず、かえって柔ら

かいタッチの選手がボール（風船）を繰り出すことができました。

オリンピック選手は、プレー同様に食事でも大事にしています。食べたもので体はできているからです。もちろんキヨリンピック選手も食事を大切にしています。3日の給食は、ひな祭りの行事食です。ちらしずしに、シシャモの尾頭付き、お吸い物、もものゼリーです。鯛の尾頭付きに、ハマグリのお吸い物とはいきませんでした。立派なシシャモ。そしてお吸い物には桜を型どったかまぼこが乗りました。



5日、種目は変わって“三食鬼ごっこ”です。赤チーム、青チーム、黄チームの3チームに分かれ、決められた色を捕まえに行きます。赤は青を、青は黄を、黄は赤を捕まえに行きます。捕まったら相手の陣地に確保される。一度捕まっても助け出す方法があります。例えば、赤1が青に捕まったとする。その赤1は青の陣地に移動。赤2が青の目を盗んで赤1にタッチすれば、青陣地から出て、再び鬼ごっこに参加できるというルール。捕まらずに生きよと臨界点まで走り続けられればよいということではありません。なぜなら、赤が青をすべて捕まえてしまうと、赤は黄に追いかけるだけになってしまうという事態に。そして、青に黄は追いかけること



がありませんから、その結果、赤は早々に青を撃退しているのにも関わらず、黄が勝利するという展開。乱暴に追いかけて捕まえればよいというわけではないのです!!ある程度人数を残しての敵の捕獲、あるいは、仲間の救済。いずれもフォーメーションが重要です。3回戦くらいから、作戦を考え相手をどのように追い込むか盛り上がっていきました。トリノ・コルティナオリンピックで“氷上のチェス”と言われる“カーリング”がしばしば報道されましたが、カーリングのように知的スポーツを感じさせ、“鬼ごっこ界のチェス”と言っても過言ではありません。対戦を重ねるごとに魅力を増していきました。

国際キヨリンピック委員会のハーヤスティ・ジュンペトリー会長は「今大会は生徒会の企画力に感激した。前大会よりも応援者に熱の入るゲーム展開が観られる競技であった。いや魅せられる競技であった」と絶大なる評価のコメントを残し、2日間の激戦の幕を閉じました。

鬼に追われるように一年が過ぎてゆきます。余すところ2週間とちょっと。令和8年度を乱暴に追いかけるのではなく、作戦をもって追いかけるよう、残された日々で準備し、令和7年度が終われるように!